

僕が断捨離を辞めた理由

2021/02/19 帽子

今村さんのみんなの広場「[80 歳からの最終章](#)」を拝読した。表題の付け方からまず感心した。またその内容についても共感するところ多々ありである。

特に出だしの「・・・これからは、最終目的地に軟着陸できるよう「下」を見ながら、そして世界を小さくしぼりながら、ゆっくり下り坂をおりていこうと思う。」にそのすべてが凝縮されているように思う。ただ僕は今村さんと違って断捨離を止めた。その理由を書いてみよう。

昨年、サービス付き高齢者住宅に住む 99 歳になる父親が自宅を売ると言い出した。もう自分は帰れないし、子供たちがそこに住む可能性はないから「残された子供たちに迷惑を掛けないように今のうちに始末しておこう」という気持ちからだろう。そして売れないと言われていた家が急に売れることになり、片付けの為、帰省した。

家の中には 20 年前に亡くなった母親のものがまだ残っていた。父親のものは施設に持ち込まなかったもの以外がすべて多量に残っている。買ったばかりの電気製品、衣類、僕らが帰省した時の為の多量の布団。そして、僕が海外で買ってきた安物の土産、そして何より、僕（と妹）の子供のころの通信簿の類、そしてアルバムなどが大量にあった。僕には持って帰りたい品々がいくつもあったが、家内にとっては全くのガラクタ、仕方がない、車に積める量は限られている。結局、安物の海外土産とアルバムのごく一部以外はすべて処理業者に始末して貰った。この費用 22 万円である。意外に安い。その後 1 年経つが、今頃、母親の茶道具はメリカリで売れば結構良い値になったかなと思うが、それでも 10 万円はしないだろう。通信簿やアルバムは捨てて全く後悔はしていない。



僕の最近の同級生の話。大学教授をしていた父親がなくなって、遺品の整理をしたら、出てきたものは、面白みのないものばかりだった。エロ本の一つでも出てきたらよかったのにと述懐していた。

結局、思い出は、あるいは、思い出の品は「個人」に属し、長年暮らした夫婦であっても、すべての思い出は共有しないし、まして子供たちは 20 年くらいしか一緒に過ごしていない。残して、喜ばれるものは、処分しやすく分けやすい資産つまり銀行預金だけという結論に落ち着いた。

つまり、断捨離の目的が残された者のために整理することなら、どうせ、死んですぐ、あるいは 1-2 年もたてば捨てられることになるだろう。自分自身のためにする整理なら、保管場所によほど困らなければ、今捨てる必要があるのだろうかもう一度考え直したほうがいい。もちろん整理しながら、昔を思い出すという副次的な目的は達成できるが、時間がいつまでかかるかわからないし、捨てられなくなるかもしれないことを覚悟しなければならない。